

みなさん、おはようございます。

(中略)

さて、夏という季節は、毎年、平和やいのちのありがたさとか、人間としてのあり方とか、そういうことを考えさせられる季節です。それは、きっと、お盆の季節であり、また広島・長崎に原爆が落とされ、終戦を迎えた季節だからだと思います。

特に今年は、新型コロナウイルス感染症と拡大防止対策として生活様式の変化がありました。今も大勢の皆さんが感染し苦しんでいること、また、マスク着用、旅行や行動の制限など、おうち時間が増えて窮屈な日常生活を余儀なくされていることもあり、例年にも増してそういったことを考えた年でした。

今日は、皆さんと一緒に、平和とかいのちといったものについて考えてみたいと思います。

今月の8月6日、広島市の平和記念式典で、小学6年生の子供代表2名は、「平和への誓い」でこのようなことを朗読しました。今回は、年寄りの私が朗読してみます。

「75年は草木も生えぬ」と言われた広島町。75年経った今、広島町は、人々の活気に満ちあふれ、緑豊かな街になりました。この町で、家族で笑いあい、友達と学校に行き、公園で遊ぶ。気持ちよく明日を迎え、様々な人と会う。当たり前前の日常が広島町には広がっています。しかし、今年の春は違いました。

当たり前前だと思っていた日常はウィルスの脅威によって奪われたのです。当たり前前の日常は、決して当たり前ではないことに気づかされました。そして今、私たちはそれがどれほど大切かを感じています。

75年前、一緒に笑い大切な人と過ごす日常が、奪われました。昭和20年(1945年)8月6日午前8時15分。目がくらむまぶしい光。耳にこびりつく大きな音。人間が人間の姿を失い、無残に焼け死んでいく。町を包む魚が腐ったような何とも言い難い悪臭。血に染まった無残な光景の広島を、原子爆弾はつくったのです。

「あのようなことは二度と起きてはならない」

広島町を復興させた被爆者の力強い言葉は、私たちの心にずっと生き続けます。人間の手によって作られた核兵器をなくすのに必要なのは、私たち人間の意志です。私たちの未来に、核兵器は必要ありません。私たちは、互いに認め合う優しい心を持ち続けます。私たちは相手の思いに寄り添い、笑顔で暮らせる平和な未来を築きます。被爆地広島で育つ私たちは、当時の人々があきらめずつないでくださった希望を、未来へとつないでいきます。

私は、翌日新聞の活字で彼らの朗読内容を知ったのですが、大変感動しました。同時に、人の心を打つ文章は、立派な内容だとか、作文技術が素晴らしいだけではないんだと思いました。

この文章を読んだ広島の小中学生のひとり、長倉菜摘さんは、4月にリニューアルされた市内の原爆資料館を家族で訪れた際、衣服などの遺品を目にして「持ち主のぬくもりや悲しみが伝わってくるように感じた」そうです。また、被爆者の証言ビデオも閲覧し、原爆は実際に人が体験したことなのだと分かって衝撃を感じ、過去に広島で起こったことを人ごとではなく、自分のこととして考えてもらえるよう、このようなメッセージを書いたそうです。

**大切なのは、「平和の誓い」本文でも触れられていますが、相手に寄り添い、相手が何を思っているかを察する想像力と共感する力なのだろうと思います。**日常生活を突然奪われ、多くの方が亡くなり、地獄そのものを体験した広島の人々。75年後の小中学生が「あのようなことを二度と起こしてはならない」という言葉の力強さと感動は、そこから生まれてくるのでしょう。

皆さんの日常生活ではどうでしょうか。皆さんの身の回りにはいる人も、8月20日現在、学校でいっしょに生活しています。相手の気持ちを汲み取って、行動をしているでしょうか。例えば、足の怪我をしている人がいたら、階段の上り下りなどでさりげなく手を貸してあげる。体調の悪い友達がいたら、保健室まで付き添う。元気がない人がいたら、その人の身になって話を聞いてみる。これらのことは日常生活の中で皆さんが実際やっていた、とてもいいことです。相手の気持ちを汲み取り行動できる人は、相手のいのちを大切にできる人です。親しい人にはもちろん、これからはそうでない人にも勇気をもって、行動してみてください。きっと皆さん自身も充実した幸せな気持ちになれますし、学校全体の雰囲気も平和で明るくなるでしょう。

さて、2学期、3年生は自分の進路を決める大事な学期です。生徒会最大行事、ポプラ祭も近づいてきました。2学期も、これまでと同じように、一人ひとりが「いいこと」を実行することで、自分を高め、蓼高をよりよい学校にしていきましょう。

いつも言うように、私は、皆さんが日々成長していくことを、とっっても期待しています。

頑張りましょう。

おわります。